

## ドクターインタビュー

## 西野 昌光(にしのみさみつ)先生

社会医療法人愛仁会 千船病院 小児科部長

大阪市西淀川区の千船病院小児科では、大阪市近隣の小児開業医と共に、地域の小児の健康管理を担っています。そこで小児アレルギーを専門に診察してられる西野昌光先生にお話を伺いました。

——先生が小児科医を目指されたきっかけなどございますか？

医師を目指したきっかけは、高校の科目で生物がすごく好きで、人間相手の仕事がしたいなと思ったことがきっかけです。小児科医と決めたのは医学部に入ってから、自分が小さい頃病弱だったことや、小学校に上がる頃から5年生ぐらいまで慢性の喘息で、ずっとしんどかったことなどもあって、小児科が合っているかなと思いました。私の卒業した神戸大学医学部は、当時は新生児医療がメインでした。喘息などは外来の先生が少し診ている程度でしたが、大学院を修了する頃には、兵庫中央病院という昔の国立療養所で喘息児と腎臓ネフローゼの子どもが多く入院していた所へ行き、アレルギーの勉強も始めていました。

——小児アレルギー外来の診察室から見た最近の患者さんの症状や治療についてお聞かせください。

アレルギー外来では、気管支喘息、アトピー性皮膚炎を主体とした小児アレルギー疾患の診療を行っています。

アレルギー治療の中で、今大変なのは食物アレルギーですね。喘息とアトピーは治療の仕方が一定してきたこともあり比較的コントロールしやすくなったと思います。アトピー性皮膚炎はプロアクティブセラピー、つまりステロイド薬と保湿剤を積極的に使う治療です。ただアトピーがらみの食物アレルギーの場合は少し大変で、赤ちゃんの生後3～6か月のときから積極的に、皮膚の治療を行い、食物アレルギーの発現を抑え、食物アレルギーがあっても必要最小限の除去で食べられるようにしていきます。

——乳児湿疹とアトピー性皮膚炎の違いや治療について教えてくださいいただけますか？

乳児湿疹のある場合、3等親以内にアトピー素因のある方、つまり食物アレルギー、花粉症、アトピー性皮膚炎、喘息、じんましん、ピアスやパンツのゴムでかぶれる人いませんか？聞いて、おられたらアトピーの可能性が高いなってことになります。また、皮膚科学会のアトピーの定義、左右対称でかゆみを伴った、慢性の湿疹があるかどうか(乳幼児で2か月以上、その他では6か月以上)など、それに当てはまるかです。しかし、湿疹が、乳児湿疹でもアトピーでも治療は基本同じで、病名より皮膚を治すことが大切です。乳児早期の、乾燥肌をほっておくと湿疹になる、湿疹をほっておくとアトピーになる、なので今の内に積極的に治療すると治っていくし、食物アレルギーにもなりにくいよと指導します。

また、アトピーの症状があって食物アレルギーかもしれないからといって予防的除去はしない方がいいです。ただし、食べて皮膚が赤くなるものは、食べない方がいいのですが、ここが難しいところで、食べてもちょっと赤くなるくらいなら、食べているうちに赤くならなくなっていくこともあるので、1回赤くなったからといって、あれもダメこれもダメ、とすると食べられないものが増えて大変なことになってしまいます。

乳幼児でなかなか治らないときは、積極的にステロイド薬を1日2回塗りなさいといえます。顔、首、わきの下、男の子なら陰囊の辺はロコイドクラスのを、体幹四肢はリンデロンクラスをしっかりと塗る。良くなってきても同じようにもう1週間塗りましょう。そして、2日に1回、3日に1回と徐々に減らしていきます。保湿剤もちゃんと使っていくと、酷くなってから受診した子でも、ほとんど2週間くらいでつるつるになっていきます。ちょっと粉を吹いて、赤くもない場合は乾燥なので保湿剤がいいですが、「目で見て赤い、触ってざらざらしている」箇所は湿疹です。乾燥ではありませんのでしっかりと薬を塗りましょう。



DOCTOR INTERVIEW

西野 昌光(にしのみさみつ)先生のプロフィール

昭和53年3月 神戸大学医学部卒業  
 昭和53年7月～昭和54年3月 神戸大学医学部附属病院小児科研修医  
 昭和54年4月～昭和55年3月 公立豊岡病院小児科医員  
 昭和58年3月 神戸大学大学院医学研究科修了  
 昭和58年4月～昭和61年6月 国立療養所兵庫中央病院小児科医員  
 昭和61年7月～昭和62年3月 愛仁会千船病院小児科医員  
 昭和62年4月～愛仁会高槻病院小児科医員  
 昭和62年8月～愛仁会高槻病院小児科医長  
 平成15年4月～社会医療法人愛仁会高槻病院副院長・小児科部長  
 平成19年4月～社会医療法人愛仁会常務理事、社会医療法人高槻病院小児科部長  
 平成25年4月～社会医療法人愛仁会理事、社会医療法人千船病院小児科部長

日本小児科学会専門医、日本アレルギー学会専門医  
 医学博士、神戸大学医学部臨床教授  
 日本小児アレルギー学会評議員

——アトピー・アレルギーの子どもさんの、日常生活で気をつける事などありますでしょうか。

よだれが垂れても、ガーゼで拭くのはいけません。石けんをつけてちゃぶちゃぶって洗ったら、ポンポンと拭きなさい。絶対にこすってはだめ。女性のお化粧直しのように、ポンポンと優しくしましょう。また、新生児の胎脂もスキングードの役割をしているので出来れば落とさない方がいいですね。でも汚れも付いてくるので洗うなら、石けんを泡立てて、泡だけを体に乗せて汚れを吸着させて決してこすらないでください。汚れやアレルギー成分は皆、タンパク質とかアミノ酸なのでぬるま湯に浸かたら水溶性なので全部流れていきます。熱いお湯は痒くなるので、40度未満のぬるま湯にゆっくり浸けてこすってはいけません。こすると、刺激で神経原因性の炎症がおきて肥満細胞が、アレルギー物質をまき散らすので、「掻く、こする」はいけません。石けんカスが残らないよう、よくすすぎましょう。低刺激の石けんでも残っているとそれが刺激になってしまいます。お風呂を上がったなら5分以内、皮膚がしっとりしている間に、まず保湿剤を全体に塗ってから、時間をかけて要所にステロイド薬を塗っていく。

また、汗や汚れのひどいときはすぐシャワーで流す。プールなど塩素の強い水に入るときは、前もってワセリンを塗っておいたり、上がったらすぐシャワーで流しましょう。そして、ちくちくする素材は直接肌に着けない。当たり前のことですが、お母さんの髪の毛も赤ちゃんの顔をちくちく刺激する場合がありますのでまとめましょう。赤ちゃんを抱くときは起毛したものを着ないでおきましょう。

お子さんにアトピーの症状がでると、「どうしよう。一生アトピーなのか」と、とても心配になるでしょうがそんなことはありません。乳幼児は正しい診断のもとに、ちゃんと治療したら絶対によくなりますよ。

——先生の趣味やストレスの解消法などございますか？

山歩きですね。私は神戸大学体育会ワンダーフォーゲル部に所属していました。今も昔の仲間等と、1～2か月に一度は山に行きます。近隣の低山や冬の上高地、春の吉野山など、山歩きはいいですよ。頭を空っぽにして、何も考えずに歩いて、降りてきたら打ち上げ。私は喘息が大学のとき再発し、一時は山へ行けなくなって、医師国家試験の2週間前に入院しました。それ以来ずっと喘息がありますが、毎日薬を飲んで、吸入薬も使用し自己コントロールしています。今少し膝を痛めていますけど、それでも、山歩きは楽しくて、止められないですね。

——本日は、ありがとうございました。